

俳句雜誌



空
令和3年5月31日発行
第19巻2号
通巻第96号



2021・5

SORA 96号

春の星(2)

柴田佐知子

目かくしの雛を闇へと納めけり
いつまでも蝌蚪をすくひし手が匂ふ
山城の跡は根の混む鳥の恋
つちふるや祠の中は石ひとつ
春の星肉やはらかに母老いぬ
足首に狙ひ定むる子猫かな
まとはりつく子猫をふはと押しやりぬ
封じたる思ひの丈に春怒濤

海鳴りを収めし灘や花まつり
うたた寝の母を海市の父が呼ぶ
畑打や異端の祈り声にせず
キリストは永久に磔刑草青む
もう誰も踏むことのなき板踏絵
ひたすらに桜が進む大八洲
山桜ひと夜小豆を浸しおく
殺生の果ての馳走や花の山
紐結はぬ女身となりぬ夕桜
神々に背を向け花の宴かな



北九州 兒玉充代

待春の朝の一步を大股に
 春となるつもり風の吹きにけり
 嵐めく雲の出てる戻り寒
 エンジンのむづかる朝の寒さかな
 冬山の寂知つてゐる鳥けもの

兵庫 岡村尚子

枯野道あつといふ間の日暮かな
 冬北斗家へ取り込む植木鉢
 海峡の大橋の灯の淑気かな
 みどり児と外湯に浸る五日かな
 番らし鳥を見てゐる春隣

直方 吉田悦子

冬霧や鎮守の杜の息遣ひ
 山眠るラジオ体操いちにさん
 冬銀河胎児のやうに眠りをり
 老犬の車道さまよふ初時雨
 筆跡は変はらぬままの師の賀状

京都 天谷翔子

山眠る麓の宿の木版画
 終電の後のベンチに聖菓の箱
 笑ふにも少し澄まして春着の子
 黒々と太々と書初の誤字
 熊の腑の暗き血の色地に浸みゆく

長崎 仲里奈央

鞆の母の手くるむ小さき手
 日記買ひ先づは写真を挿みをり
 結末はこれから変ふる狂ひ花
 冬薔薇掛くる言葉の見つからず
 遺されしものは優しさ冬董

兵庫 林徹也

寒釣や座禅のごとく背を向けて
 尼寺に男はたらく冬桜
 注連飾る舳先二百の舟屋口
 喰積や味は亡き母のレシピ
 まづ父に目玉供ふる桜鯛

兵庫 大西乃子

耳もとに寄りては離れ雪蛭
 地下街に灯りあふるる十二月
 島山の風に煽られ百合鷗
 風の夜は風を聴きつつ毛糸編む
 おもかげの半分失せし賀状かな

兵庫 岩井京子

目つむりて猫が社殿に初日浴ぶ
 初雀千子と声のみ聞かせけり
 初泣きの女兒らしひよいと抱へらる
 会ふことの絶えひとり詠む歌かるた
 連れらるる犬目印に賀詞申す

東京 山田 正子

白鷺の来てより鴨は忘れらる
人恋し室咲きの花買うてみる
埋火や消しても消えぬ傷のあり
枯野原色とりどりの子ら走り
匂ひかぐどこか無愛想榎植の実

福岡 あさなが捷

見つめ合ふことなき日月内裏雛
処分票貼られし露地のケース雛
金堂の暗きより出て白木蓮
春灯や悪党油まみれなる
正装の角髪は固し青嵐

空集作品評

柴田佐知子

〈撃ちとめし猪を載せたる大秤〉〈川風や捌きし猪の血の匂ひ〉〈斧の柄につきし獵夫の握り癖〉などの猪猟の連作七句の中の一句。臨場感のある力強い詠みぶりである。現場に立つことではかどらえることができない血の匂いも感じさせられる句群である。

席を立つやうに人逝く十二月

角野 良生

人が死を迎えるときを詠んだ俳句には、優れた比喻が用いられた句が多い。たとえば〈死ぬときは箸置くやうに草の花 小川軽舟〉は一読、記憶に刻み込まれた作品である。

良生さんの句は他者の死である。親しい人が、また一人この世から去ってゆかれたのであろう。〈席立つやうに〉のひそやかさに胸を打たれる。その席は永久に空いたままなのである。

兵庫 えとう 樹里

一枝にこみあつてゐる寒雀
鳥の影弧の交差する冬野かな
極月の賀茂の神山からす飛ぶ
梟や良き名を吾子にさづけくれ
ポケットから鳩の飛び出る春待とう

鬼の息混じりてゐたる虎落笛

高倉 和子

冬の強風が笛のような音を立てる。真夜中の虎落笛かもしれない。寒さがつのつてくるような虎落笛の不穏な音に〈鬼の息〉を聞き取るとは面白い。作者の想像力豊かな素地があつてこそその表現である。

水平は夢見るところ浮寝鳥

山本 則男

浮寝鳥ならば水に浮いているので、〈水平〉上に眠っているのは当然だろうと思う。しかし人類も一番安らかに〈夢見るところ〉は〈水平〉だ。からくりのような奥行きのある句である。

年用意よいしよと言へば誰か来る

田中とし江

重い物を取り出したり持ち上げたり…思わず〈よいしよ〉と声が出る。すると手を貸そうと来てくれる人が居るのである。「よいしよ」と言おうが「どっこいしよ」と言おうが反応する人が居ない私から見ると何ともうらやましいことだ。見逃しがちな「幸せ」が軽妙に詠みとめられている。



空集抄 柴田佐知子抄出

天井に猪吊る滑車獵師小屋

深川 淑枝

席を立つやうに人逝く十二月

角野 良生

鬼の息混じりてゐたる虎落笛

高倉 和子

水平は夢見るところ浮寝鳥

山本 則男

せつせつと白魚の眼に見上げらる

吉田 律

ときどきはま中くぼませ若菜籠

永淵 恵子

中身はみ出してパン屋の福袋

曾根 富久恵

こしの有る藁を選びて注連を緬ふ

石橋 幾代

押し倒し科ある如く羊刈る

中田 みなみ

鮫鱈のたましひまでも喰ひけり

戸栗 末廣

爆心地暮れて狐火十五万

星加 鷹彦

故郷の山迫りくる初電車

林 徹也

叩かれし野火のしぶしぶ燻れり

秋 千晴

目の合ひし鳥の飛び立つ初山河

西住 三恵子

木の芽つむ不機嫌な夫ほつといて

山内 碧

束ねても違ふ方向く一年生

秋津 令

消火栓ひとつひとつに雪囲

松田 明子

年用意よいしよと言へば誰か来る

田中とし江

夕陰やぼろぎれのごと干菜吊り

河原 敬子

リア王のさまようてゐる枯野かな

荷宮 克代

大寒や玉子切らさぬうちに買ひ

原 友子

あけやらぬ寒鮒市へ父急ぐ

三井所 美智子

待春や天文台は沖に向き

大西 乃子





老いらくの恋は恐ろし夜の雪

吉田悦子

日向ぼこ影もやつぱり老いてをり

山田正子

驚きしごと梟のみつめをり

苑実耶

微笑みに返すウインク風光る

今井康子

住みつけて不自由はなし札納

森田明成

歌がるた三人家族物足りず

仲里奈央

常備菓飲んでひと日の畑を打つ

坂口学

初転び地球を膝に抱きにけり

田岡千章

寒風に水面あまたの擦過傷

服部早苗

冬晴や鴉の群の高笑ひ

青木朋子

ダイヤモンドダストを乗せて調教馬

押田裕見子

クリスマス銀の呼び鈴振つてみる

青木和男

うどん屋の大きなおはぎ雪催

横田敬子

雪の坂踏まへどころを確かめて

兒玉充代

もう八十まだ八十や初日記

田口萬智子

お供する犬の困惑秋の雨

田中素直

病去り英彦に向かひて書初めす

日高孝

気の荒い鴨にぶつけるパンの耳

矢野綾子

裸木のいよよ銀河へ翔つかたち

えとう樹里

雪やこんこん歌へば母の心配する

本多トミ

亡き母が居り湯豆腐の湯気やさき

大谷政光

妣も吾も生まれし家や冬ぬくし

岩下きぬ代

鼻輪して羽子板の牛はみ出せる

岩井京子

走り根に躓き転ぶ初詣

倉智万数雄

寒風や顎まで浸かる露天風呂

牧康子

犬の毛の寝癖を笑ふ冬の朝

林れい



撃ちとめし猪を載せたる大秤

北州 深川 淑枝

天井に猪吊る滑車獵師小屋

鬼の息混じりてゐたる虎落笛

福岡 高倉 和子

川風や捌きし猪の血の匂ひ

追ひつけぬバスを見送る十二月

鍛冶師の名刻まれし斧獵期来る

横向きに並べて干支の丑を売る

斧の柄につきし獵夫の握り癖

大きめの宝船敷き眠られず

猪撃ちし藁菔の殻うすひかり

揺れてをり吹雪の中の街灯も

猪肉を焼く火足したる日暮かな

雪煙の中より鷹の上がり来し

太宰府 山本 則男

廢校に小使ひ室や赤とんぼ

福岡 角野 良生

垂直の鶴の一身凍てにけり

落葉掃く生涯と言ふ寺男

ふくろふの正眼闇を治めたる

同病者親し疎まし枇杷の花

聖堂の石の不揃ひ笹子鳴く

凍鶴の眼のほかは凍てにけり

直方 曾横富久恵

水平は夢見るところ浮寝鳥

寒柝をひときは高く材木屋

せつせつと白魚の眼に見上げらる

粕屋 吉田 律

雪景色紙のやうなる月上げて

寸分の緩みもあらぬ木の芽かな

中身はみ出してパン屋の福袋

銀嶺の大きく迫る春田打

冬ぬくし夫が繕ふ柔道着

突風に首おし立つる残り鴨

荒彫りの仏の丸み小六月

満開の桜が隠す墳の嵩

直方 石橋 幾代

永き日や何でも容るる母の胸

こしの有る藁を選びて注連を緬ふ

門松の試作の竹を寄せてあり

福岡 永淵 恵子

春の猫横走りして消えにけり

舞初の扇ゆつくり舟をこぐ

泣きさうな顔となりたる雪達磨

風に乗る初風の糸ゆるるべけり

音失せし凍滝凄む形をして

勝独楽のうなりて回る深傷負ひ

七日粥食べて体の軽くなる

ときどきはま中くばませ若菜籠

投げやりに倒れてみたるクローバー

東京 中田みなみ

御手洗の水浴ぶる鳥日脚伸ぶ

押し倒し科ある如く羊刈る